

日本人学校に求められる安全と安心

前ニューデリー日本人学校 教頭

新潟県十日町市立十日町小学校 教頭 高橋 雅彦

キーワード：在外教育施設、インド、安全対策、大気汚染、教頭

1. はじめに

私は2003～2005年度の3年間、ドイツのデュッセルドルフ日本人学校に教諭として赴任した経験がある。初めての海外生活。そして、2006年に行われたサッカーのドイツワールドカップ開催を間近に控えての帰国は、少々残念な思いであった。そして、このたび教頭としてインドのニューデリー日本人学校へ派遣していただき、2015～2018年度の3年間で過ごすこととなり、2回目の派遣を終えてこのたび帰国した。

2. ニューデリー日本人学校の概要

(1) インド・ニューデリー

国土面積は世界7位、人口は12億人以上（一説には13億人）で日本の10倍。その首都がニューデリーであり、約1,300万人が住む巨大都市である。これまで多くの日本企業がインドに進出し、市場の開拓に取り組んできた。インド全体では8,000人以上の在留邦人（2016年現在）がいるが、その90%以上が日本企業のビジネスマンとその家族である。そのうちの約半数がニューデリーや近郊のハリヤナ州のグルガオン（現在は「グルグラム」に改名）に居住している。



芝生のグラウンドから見た新校舎と全校児童生徒

(2) 学校施設

1964年に世界で3番目に古い日本人学校として誕生し、1991年に現在のバサント・クンジ地区へ移転した。約270名の児童生徒と70名を超える幼稚園児が在籍している。2014年に50周年を迎え、待望の新校舎が完成した。1階を附属幼稚園、2～4階の15教室を日本人学校が使用している。

夏は40℃を優に超える気温となるため、各教室や体育館にはエアコンを完備している。また、屋内プールを利用しての水泳授業が4～9月まで続く。スクールバスを15台有し、児童生徒の登下校にはそのうちの13台が3方面に分かれて運行している。

3. 安全・安心な学校のために

(1) 安全対策

保護者が学校に求めるものは少なくないが、その中で「安全」は最重要と言える。入校者に対するセキュリティチェックと施設内の警備のために警備員（女性1名を含む8名）を24時間雇用することはもちろん、防犯カメラ（計20台）を設置したり、塀の高さを上げ有刺鉄線を張り巡らせたりするなど、外部からの侵入を防ぐ対策をとっている。また、保護者や学校職員にはIDパスが発行される。年間3～4回の避難訓練を実施し、その中で不審者やテロリスト侵入対策の避難訓練が行われる。また、2017年度は外務省の支援を受けて、新校舎の各階にテロリスト侵入防止のシャッターを取り付けたり、避難用非常扉等の強化を行ったりして、学校施設の安全強化対策工事に1年間かけて取り組んだ。

幸い、私の派遣期間中に外部から不審者が侵入することはなく、登下校を含め、児童生徒が危険な状況に陥ることはなかった。警備員は日中・夜間に施設内の巡回等を行うが、警察や軍隊ではないため、拳銃等は所持していない。他のインターナショナルスクールに見られるような厳重な警備体制を日本人学校でとることは現実的に難しい状況だった。そうした点を不安に思う保護者の声も聞かれた。

(2) 感染症対策

どんなに塀を高くしても防ぐことのできない侵入者がいる。それは「蚊」である。「デング熱」は、デングウイルスに感染した蚊に刺されることにより伝播する感染症で、雨季の終盤である8月末頃より、11月下旬まで発症が続く。一度発症すると1週間ほど高熱が続き、白血球が減少するため症状が悪化すると輸血が必要になるほどである。また、近年「チクングニア」と呼ばれるデング熱同様の症状を見せる感染症も発症しており、罹患者が急増する傾向がある。

教室には蚊を防ぐための器機が取り付けられている。また、児童生徒は一人ひとり虫除けの薬を持参し、屋外での活動の前にはそれを塗るようにしている。校内の各所には蚊取り線香が焚かれるとともに、週末前の夜には殺虫剤を校地内に散布する。「最大の予防は蚊に刺されないこと」であり、刺された後からかゆみ止めの薬を塗るのでは手遅れとなる。学校周辺には大きな池があり、蚊の発生するシーズンには無数の蚊が校内を飛び回る。そのほとんどはウイルスに感染していないものであるが、あまりの多さに日本人は目の前を蚊が飛んでいるとすぐにつぶしたがる。ところが文化の違いからか、インド人は手ではらいのける程度である。

(3) 野生動物対策

自然の豊富なインドでは、街中であつても路上にはイヌやウシがのんびりと横たわっており、学校の校庭ではリスが戯れている。サルの親子が姿を見せることもある。しかし、こうしたのどかな雰囲気とは裏腹に野生動物には注意を払う必要がある。うかつに近づいて噛まれると「狂犬病」に感染する恐れがあるためだ。児童生徒には、そうした野生動物のもつ危険性に対して日頃から指導している。また、あらかじめ日本で狂犬病の予防接種をうってからこちらに来ることも一般的である。

校地内にイヌが侵入することはまずないが、サルは高い塀も問題にせず頻繁に入ってくる。サルには凶暴な面があり特に危険である。サルの出現が多かった年は、対策のために臨時にサルの専門家を1か月間雇用したこともある。校舎にサルを近づけないようにするために、サルの嫌がる音を流したり、他から力のあるボスサルを連れて、施設周辺を巡回したりした。効果の程は分からないが、日本では考えられないような対策もこちらでは真剣に考え、実行する必要があった。

(4) 大気汚染対策

近年、ニューデリー周辺の大気汚染はますます進み、学校ではAQI (Air Quality Indexの略) の数値により屋外での活動が制限される期間が長くなっている。ヒンドゥー教の正月に当たるディワリ (例年10～11月の期間) が過ぎると大気汚染が一気に進み、2～3月までは屋外の景色が霞んで見える程になる。2015年には自家用車のナンバーによる交通規制が実施され、2017年にはディワリを祝うための花火が禁止される事態になった。しかし、大気汚染対策としてそれほど効果があったとは言い難い。その対策の後もAQIの数値は例年と変わらず上昇した。

教室には空気清浄機が2～3台設置され、常時稼働している。フィルターの汚れ具合からも、その深刻さが分かる。児童生徒の多くはインドで入手可能なフィルター付きの高機能マスクをして登下校している。また、教室での授業であつて



大気汚染の悪化により、朝でも霞んで見える太陽

もマスクを外さない子も見られる。学校でも朝7:00と昼11:00に測定したアメリカ大使館発表の数値を基にして、その日の屋外での活動について決定している。特に10～2月にかけては大気汚染が加速し、日本では考えられないような数値が示される。自宅に空気清浄機を複数台購入する日本人家庭がほとんどである。

AQIの数値・段階		本校の対応
0 - 50	Good	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒は通常の活動が可能。 ・ 健康上不安のある児童生徒は個別に対応する。
51 - 100	Moderate	
101 - 150	Unhealthy for sensitive groups	
151 - 200	Unhealthy	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童生徒はなるべく屋外の活動を控える。 ・ 健康上不安のある児童生徒は屋外の活動を中止。
201 - 300	Very Unhealthy	<ul style="list-style-type: none"> ・ 屋外での行事や部活動は活動時間を制限する。または中止とする。 ・ 1時限の授業（体育他）と中休み、昼休みのみ外遊びが可能。
301 - 500	Hazardous	<ul style="list-style-type: none"> ・ 屋外での行事、部活動、外体育、外遊びを行わない。 ・ 1時限の授業で運動を伴わない活動（理科観察、スケッチ等）のみ可能。

※ AQIとは、米国環境保護庁による大気汚染の状態を示す指数（Air Quality Index）

（参考）米国大使館の測定値HP：<http://newdelhi.usembassy.gov/airqualitydataemb.html>

(5) 食生活と飲料水について

様々な宗教が混在するインドだが、国民の約80%はヒンドゥー教徒である。ヒンドゥー教ではウシは神様が乗る神聖な動物と考えられており、信者は牛肉を食べることはない（ただし、水牛の肉は食べても問題ない）。また、不衛生なためか豚肉も食べない。もっぱら鶏肉とヤギの肉のみである。卵であっても加熱していないものは食べられない。新鮮な魚貝類はほとんど手に入らない。たとえ手に入ったとしても鮮度に不安が残る。また、肉類を一切食べない菜食主義者も多く、飲食店には「ベジタリアン」と「ノンベジタリアン」に分かれたメニューが並ぶ。日本でもお馴染みのファストフードのハンバーガーショップでは、日本人のイメージする牛肉を使用したハンバーガーは販売されておらず、ベジタブルコロッケや鶏肉のフライを挟んだようなものがメニューに並ぶ。そして、ほとんどが辛みの効いたインド人好みの味付けになっており、日本人の味覚には合わないものが多い。以前よりは日本食が身近になったものの、食べたい食材はすぐには手に入らない。また、質のいいものは高額にならざるを得ない。そのため、一時帰国の際に日本食材をまとめて購入してきたり、隣国に食材の買い出しに出かけたりする家庭も少なくない。

学校での児童生徒の昼食は弁当である。売店はなく、外注による昼食の販売も行っていない。弁当が昼まで傷まないように、無人の教室であってもエアコンを25℃設定で常時稼働させている。普段から食品の管理に気を遣っている家庭が多い。しかし、それでも原因不明で突然お腹を下すことも少なくない。一度調子が悪くなるとその症状が1週間以上続くこともある。さらに症状がひどい場合は、医療機関で点滴を受けたり、入院したりすることになる。

自宅でも学校でも水道水は飲むことができない。店で飲料水を購入するか、浄水器を通した水道水をいったん湧かしたものを飲料水として利用している。浄水器の機能のある公用の水道も街中にあるが、日本人が利用することはまずない。児童生徒は学校に水筒を持参するようにしている。また、学校では飲料水を購入し、専用のサーバーからいつでも補給できるようにしている。サーバーは校舎内の各所に置かれており、ボトルが空になるとインド人スタッフが交換する。サーバーには冷却機能があるものの、あまりの気温の高さからかそれほど冷水にはならない。下校の際、スクールバスが交通渋滞に巻き込まれることもあるため、飲料水確保のために水筒が空のまま下校しないように指導している。

(6) ストレスについて

ニューデリー近郊の道路状況は悪く、交通渋滞は日常的である。それが原因で登校や帰宅が遅れることもしばしばである。児童生徒が帰宅後に自由に友達の家遊びに行くことはなかなかできない。また、気軽に買い物に行けるような店も身近にはない。保護者も閉塞的な人間関係の中にいるため、人付き合いのあまりうまくない方は、疎外感を感じることもある。

住み慣れた日本と比較するとインド社会は制限だらけと言える。それが子どもにとっても大人にとっても精神的な負担となり、ストレスの蓄積につながる。児童生徒や保護者がストレスを抱えて生活することは教育活動にとって好ましくない。外部に相談機関のない現地では、こうした不安やストレスの軽減が学校に求められており、本校ではスクールカウンセラーを雇用し、週3日間勤務していた。面談を希望する保護者や児童生徒の不安や悩みを耳を傾け、時に改善のためのアドバイスを行う。また、毎週開かれる学校の生徒指導部会にも参加し、問題を抱えた家庭について教職員と共通理解を図るようにした。さらに、具体的な対応について教職員に示唆することもあった。

ストレスを感じるのは教職員も例外ではない。保護者との対応、気になる児童生徒への指導、学級経営の不安…。なかなか同僚や管理職に話すことのできない悩みをカウンセラーに相談する者もいた。

4. 終わりに

在外教育施設の運営において、児童生徒が安全で安心して学校生活を送れるようにするためには、少しでも有効だと思われるものに関して積極的に取り組んでいく姿勢が求められた。施設的なセキュリティを高めることはもちろんのこと、児童生徒、保護者、教職員とその家族、インド人スタッフ…、そうした学校に関わる全ての人の精神的な健康を維持することもそこに含まれた。そのためには、普段から良好な人間関係を築き、そこから広がる情報網を生かすことが大切であった。集まってくる様々な情報から総合的に判断し、大事に至る前に対応を考えなくてはならない。そうした対応の先頭に立つことが教頭に求められた。生活環境としてはまだまだ厳しい面の多いインドで、日本人が生活する上で、また、学校を運営する上で、安全と安心を実現することは決して容易なことではない。そのことを深く感じた3年間であった。